# ところ

# 遺跡の森

## ガイドブック

「ところ遺跡の森」は遺跡と自然に親しむ場として平成５年にオープンしました。以来 20 年余りが経過し、老朽化してしまった施設もあるため平成 28 年度から再整備を行っています。

これに伴い、改めて「ところ遺跡の森」の全体像をまとめたのがこのガイドブックです。「遺跡の森」の中にある遺跡とその発掘成果について解説するとともに、現在進められている復元竪穴住居の整備についてもご紹介しています。

「遺跡の森」を見て、大昔の遺跡や歴史について詳しく知りたいという方に向けた１冊になっています。

## 目　次

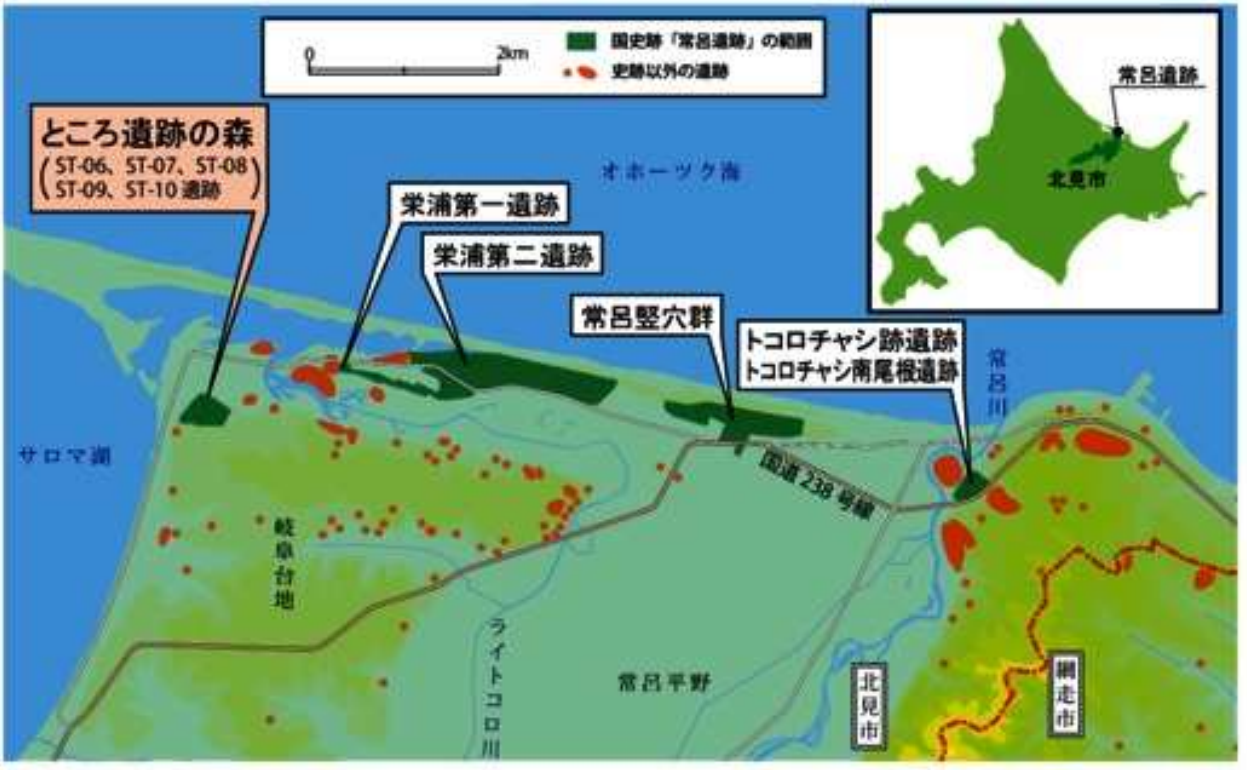

「ところ遺跡の森」と遺跡の町・常呂 ・・・・・・・・・・・・・・1
国指定史跡「常呂遺跡」と竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・2
「ところ遺跡の森」の古代の村 ・・・・・・・・・・・・・・・・・4
擦文の村 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
続縄文の村 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
縄文の村 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
付録①　オホーツク文化 ～ もう１つの竪穴住居文化 ・・・・・19
付録②　アイヌ文化期 ～ 竪穴住居から平地住居へ ・・・・・・20
遺跡の森の草花 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

# 「ところ遺跡の森」と遺跡の町・常呂

北海道北見市の海岸部にあたる町・常呂は古い遺跡が数多く残る地域として知られています。特に、オホーツク海やサロマ湖に面した地区の林の中には現在まで大きな開発を受けずに残されている広大な遺跡があり、国指定史跡として保護されています。

国指定史跡は４つの地区にまたがっており、全体をまとめて「常呂遺跡」と呼んでいます。その中の最も西側の地区が「ところ遺跡の森」です。

「ところ遺跡の森」では大昔の住居を実物大で再現した復元建物や、この地域に残る様々な時代の遺跡から発掘された出土品を展示し、大昔の人々の暮らしを見て体験できる場所として整備を進めています。




▲ 史跡「常呂遺跡」と「ところ遺跡の森」（国土地理院発行の２万５千分の１地形図「常呂」・「サロマ湖東部」を元に作成。）

国指定史跡「常呂遺跡」は総面積約 128ha に及ぶ広大な遺跡群です。西側から順に、

（１）ところ遺跡の森 (ST-06、ST-07、ST-08、ST-09、ST-10 遺跡の５遺跡が含まれます )

（２）栄浦第一遺跡・栄浦第二遺跡

（３）常呂竪穴群

（４）トコロチャシ跡遺跡・トコロチャシ南尾根遺跡

の４つの地区にまたがる 10 の遺跡から成っています。

また、史跡となっている地区以外でも、周辺では数多くの遺跡が見つかっています。

# 国指定史跡「常呂遺跡」と竪穴住居

国指定史跡「常呂遺跡」の特徴の１つは、大昔の集落の跡が今でも地面の上に見える状態で、広い範囲にわたって残っていることにあります。大昔の人々は、「竪穴住居」と呼ばれるタイプの家に住んでいました。「常呂遺跡」では、この竪穴住居の跡が現在でも埋まりきらず、窪んだ状態で数多く残っているのです。

## 竪穴住居とは？

竪穴住居とは、地面に掘った大きな穴（竪穴）を床・壁とし、その上を屋根で覆った造りの住居のことです。床と壁が地中にあるため屋内の保温性に優れていました。床が地面より低くなりますが、掘った土を竪穴の周りに盛って土手を作り、雨水などがそのまま流れ込まないようになっていました。

竪穴住居は、日本では縄文時代初め頃、約 14,000 年前には造られていたことは確実で、それより古い可能性のある竪穴住居跡もいくつか見つかっています。北見市内では 8,000 ～ 7,000 年前頃のものが最古のものです。以降、一般的な住居の建て方となり、12 ～ 13 世紀頃の擦文時代末まで使われました。本州以南でもほぼ同じ頃の平安時代までは農民の住居として一般的なものでした。

その後は姿を消していきますが、日本では江戸時代初め頃までは建てられることがあったようです。例えば、島原の乱 (1637 ～ 38 年 ) では原城に籠る一揆の人々が城内に竪穴住居を建てて生活していたことが知られています。

寒冷な地域ではもっと遅い時代まで竪穴住居が使われていました。サハリンや千島列島では 20 世紀初めまで竪穴住居が使われており、写真や図面の記録も残っています。こうした記録は、北海道の大昔の竪穴住居がどのような建物であったのか考える上でも重要な参考になっています。

**◀ サハリンのアイヌの冬用竪穴住居**

20 世紀初めの記録をもとにした復元模型で、右半分は屋根の外側を外して内部の造りを見える状態にしたものです。屋根は木の骨組みの上を草で覆い、さらにその上を土で覆っていました。竪穴部分は約 1m の深さに掘られていました。積雪が深くなっても出入りできるよう、屋根にも出入口が造られていました。

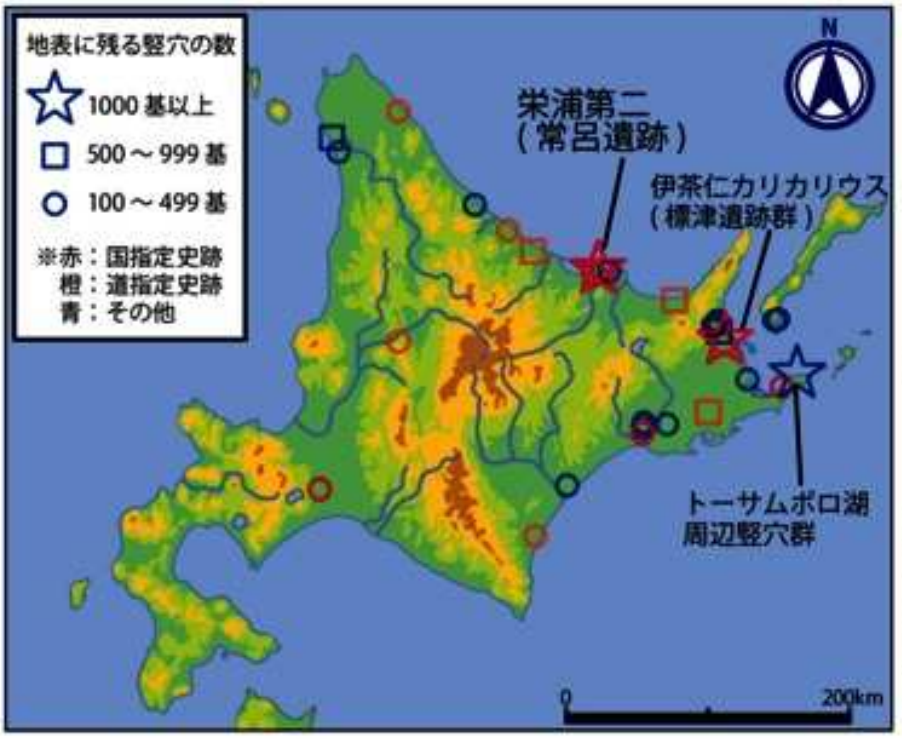
◀栄浦第二遺跡の竪穴住居跡

栄浦第二遺跡は「常呂遺跡」の中で最も大規模な遺跡です。多くの竪穴住居跡は樹木や笹に覆われているため、夏は存在が分かりにくく、雪融け後、まだ植物が枯れている春先に見やすくなります。この写真ではちょうど竪穴住居跡で窪んだ場所に雪が残っています。

## 地表に残る竪穴住居跡

竪穴住居は、使われなくなって屋根や柱などの建物部分が失われても、竪穴の部分が遺跡に残ります。こうした竪穴住居の跡は、通常は長い年月のうちに土に埋もれていきます。しかし、北海道のような寒い地域では落ち葉などが分解されて土になるのが遅く、古い遺跡が完全には埋もれずに残っていることがあります。

このように竪穴住居跡が地面に残っている遺跡は北海道各地で見つかっています。常呂遺跡はその中でも特に範囲が広く、竪穴住居跡の数が多い遺跡で、標津遺跡群（標津町）やトーサムポロ湖周辺竪穴群（根室市）などと並んで大規模な遺跡として知られています。常呂遺跡を構成する遺跡で最も大規模な栄浦第二遺跡で約 2000 基、ところ遺跡の森では約 150 基、常呂遺跡の全体で約 2700 基の竪穴住居跡が残っています。




◀北海道に残る主な竪穴群

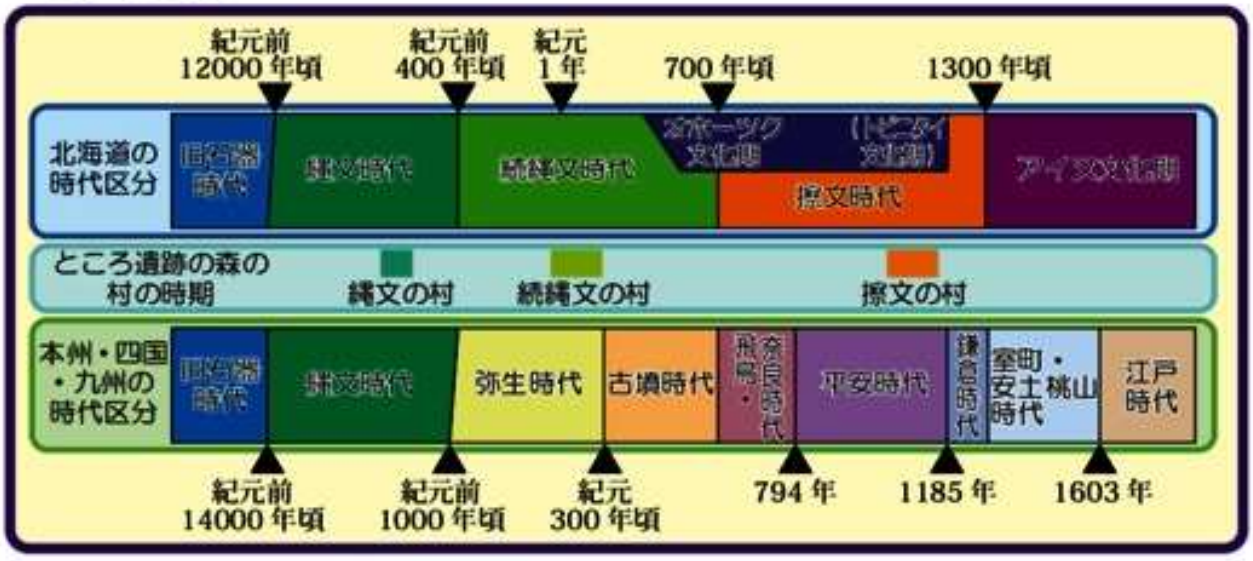
竪穴住居跡が地面に残っている主な遺跡。北海道東部の海岸沿いの地域に多い傾向があります。

# 「ところ遺跡の森」の古代の村

国指定史跡「常呂遺跡」の中でも最西端の地区、「ところ遺跡の森」では、森の中に広がる様々な時代の村の遺跡を見学することができます。遺跡の中には竪穴住居の復元建物も建てられており、古代の村の雰囲気を体験することができます。また、実際に「遺跡の森」で発掘された資料を保管・展示する施設も併設されています。

## 北海道の歴史と時代

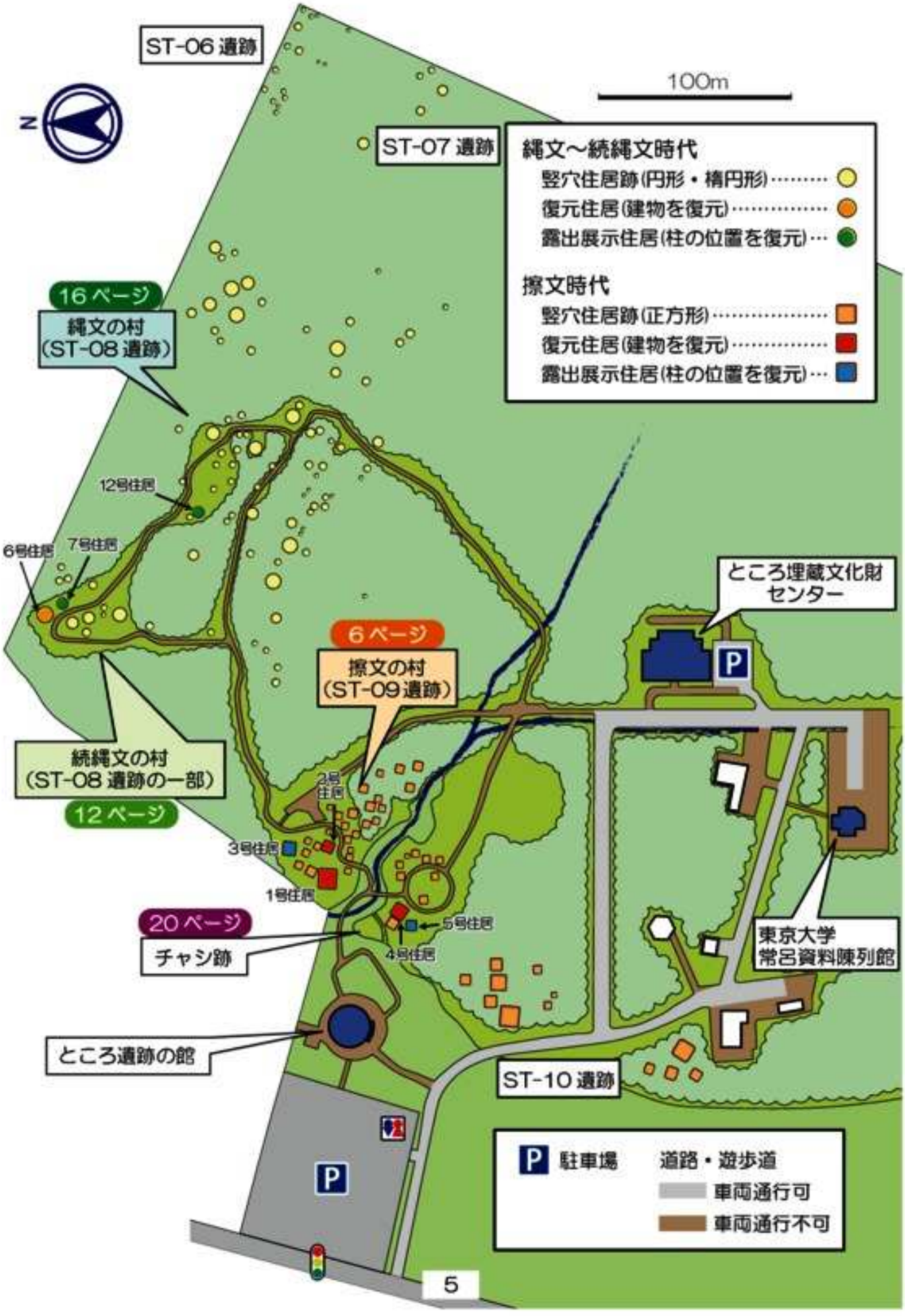
遺跡の森にある古代の村はいつの時代のものなのでしょうか。日本列島の中でも独特の歴史と文化をもつ北海道では、歴史上の時代区分も独自のものになっています。縄文時代の後、本州で弥生・古墳時代に相当する頃は続縄文時代、飛鳥・奈良・平安・鎌倉時代に相当する頃は擦文時代と呼ばれており、それぞれ本州以南とは異なる文化が栄えていました。「遺跡の森」にはこのうち、縄文・続縄文・擦文の各時代の竪穴住居跡が残されており、森の中の遊歩道を一回りするとこれら各時代の文化に属する遺跡を見ることができます。




▲時代区分と「ところ遺跡の森」の遺跡の時期

◀「ところ遺跡の館」

遺跡の森の玄関口にある「ところ遺跡の館」では遺跡の出土品を通して北海道の歴史の移り変わりを見ることができます。「遺跡の森」の竪穴住居跡で発掘された土器なども展示されています。


ST-06 遺跡
N
100m
ST-07 遺跡
縄文～続縄文時代
竪穴住居跡(円形・楕円形)
復元住居(建物を復元)
露出展示住居(柱の位置を復元)
擦文時代
竪穴住居跡(正方形)
復元住居(建物を復元)
露出展示住居(柱の位置を復元)
16ページ
縄文の村
(ST-08 遺跡)
12号住居
6号住居
7号住居
ところ埋蔵文化財
センター
6ページ
擦文の村
(ST-09 遺跡)
続縄文の村
(ST-08 遺跡の一部)
12ページ
2号
住居
3号住居
1号住居
20ページ
チャシ跡
5号住居
4号住居
東京大学
常呂資料陳列館
ところ遺跡の館
ST-10 遺跡
駐車場
道路・遊歩道
車両通行可
車両通行不可

# 擦文の村

「ところ遺跡の館」の裏手の遊歩道を進み、階段を昇った先の小高い場所に擦文時代の集落の遺跡が広がっています（遺跡としての正式な登録名称はST-09遺跡）。擦文時代とは北海道独自の時代区分で、7世紀頃から12・13世紀頃まで続きました。畑作や鉄器の使用が広まるなど、本州から大きな影響を受けて北海道の文化が変化した時代です。遺跡の森にある「擦文の村」は擦文時代の後半、11～12世紀頃の遺跡です。

◀「擦文の村」に残る四角い竪穴住居跡（白い点線で囲んだ部分）

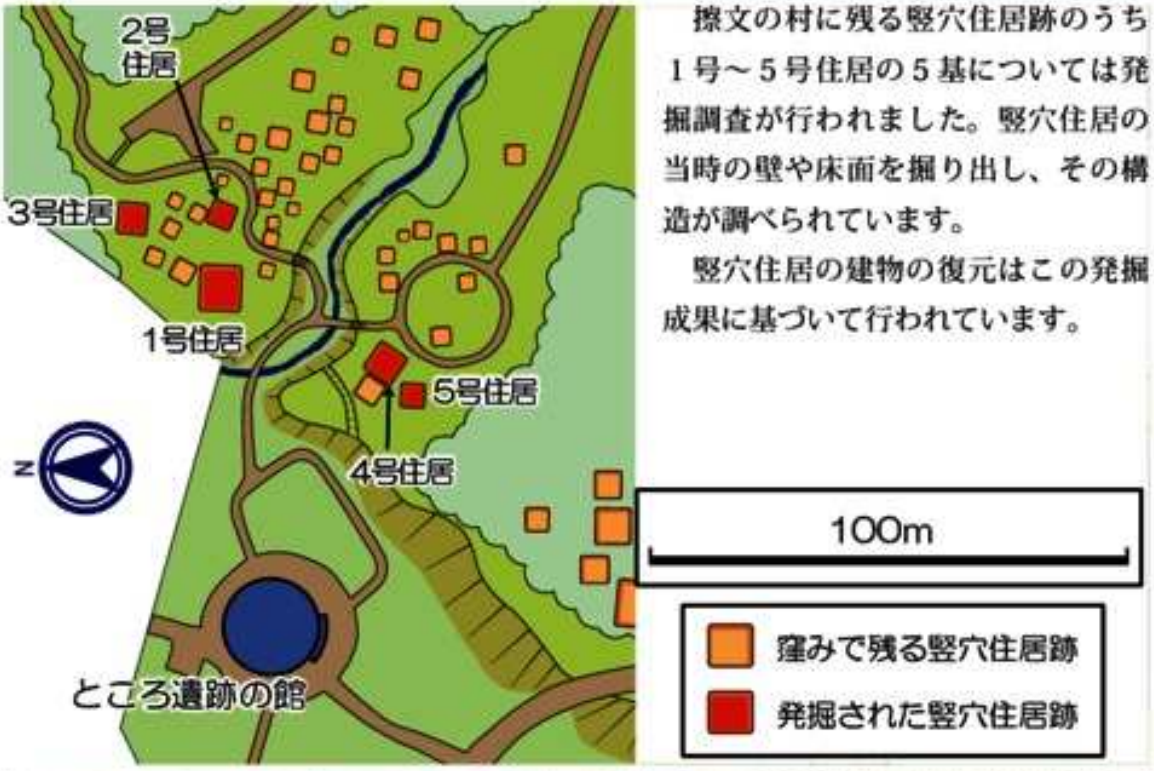
擦文時代の住居跡はほぼ正方形なのが特徴で、その形によって他の時代の住居跡とは区別ができます。擦文の村では竪穴住居跡が谷の周りに約40棟分残っており、またその南側に続く台地の崖沿いにも10数棟分が残っています。多数の住居跡がありますが、同時に建っていたのは2～数棟だったと考えられています。擦文時代の人々には住居を新築する際、古い住居があった場所は使わないという決まりがあったようです。場所をずらして新築を繰り返した結果、現在のように竪穴住居跡が密集して残されたというわけです。

**「擦文の村」に復元された竪穴住居 ▶**

遺跡に残っているのは住居の跡だけで、擦文時代当時の建物自体は残っていません。

当時の村の様子を再現するため、遺跡の中に竪穴住居の建物を復元して建てています。平成29年度には擦文の村の竪穴住居1棟の建て替えを行います。

## 縄文の村の発掘調査




縄文の村に残る竪穴住居跡のうち1号～5号住居の5基については発掘調査が行われました。竪穴住居の当時の壁や床面を掘り出し、その構造が調べられています。

竪穴住居の建物の復元はこの発掘成果に基づいて行われています。

**▲1号住居跡**　1辺約10mの大きさの、縄文の村で最大の住居。

**▲4号住居跡**　1辺約6mの平均的な住居。排水用(?)の溝がある珍しい造りでした。

**▲炭化した木材(1号住居)**　建物は焼けており、炭化した板材が残っていました。

**▲3号住居で見つかった土器**

## 擦文の村の出土品

竪穴住居の発掘調査では当時の生活用具なども発見されました。主な出土品はこの時代の土器である擦文土器や紡錘車などです。この時代の北海道では鉄器が普及しましたが、錆びてしまうこともあって遺跡からはあまり見つかりません。

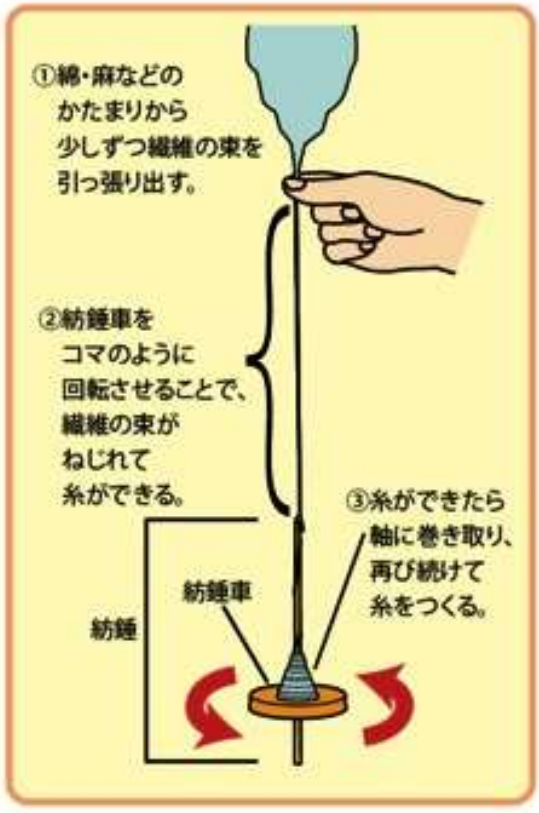
**擦文土器の高坏（左：高さ約 12cm）と甕（右：高さ約 37cm）** ▶

擦文土器は木のヘラで擦って表面を仕上げています。土器の表面に残る擦った痕を「擦文」と言い、ここから「擦文土器」と呼ばれています。「擦文時代」という時代の名前はこの擦文土器に由来するものです。擦文土器の作り方やデザインは同時期の東北地方から伝わったもので、主として甕、高坏、坏などの形があります。甕はかまどに置いて使うため細長い形をしています。この時代には北海道でもオオムギ、キビ、アワなどの畑作が始まり、こうした穀物などの調理に使われたようです。これに対し、坏や高坏は主に配膳用の器として使われたものとされています。

**▲紡錘車（一部破損、右側の直径約 6cm）**

紡錘車は「紡錘」という糸作りの道具の一部です。本来は右の図のように中央の穴に軸を通してあり、材料となる綿や麻などの繊維から糸を作る道具でした。

北海道では擦文時代以降、多数発見されるようになります。




**紡錘を使った糸作りの方法** ▶

◀擦文時代の住居の屋内空間

擦文時代の住居は中央に炉（たき火をする場所）、一方の壁にかまどがあり、それ以外の三方の壁際は板敷の床などになっていました。

土器や紡錘車などはかまど周辺（図中のA）や、かまどから見て左側の壁際（B）で見つかる傾向があります。料理や糸作りは女性の仕事だったと考えられていますので、炉の周りのDを共有空間として、A・Bが女性の空間、Cが男性の空間という使い分けがあったのではないかという説もあります。

1号住居出土の擦文土器▶

大小の甕と高坏があります。

かまどや、かまどから見て左側の壁際でまとまって見つかりました。

◀3号住居出土の擦文土器

3号住居は1号住居に次ぐ大きさの竪穴住居で、1号住居と同じく大小の甕、高坏がそろっています。特に、把手のある擦文土器はやや珍しい形のものです。

3号住居は発掘調査された中で唯一かまどがなく、かまどとの位置関係では説明できませんが、壁際の1か所に多くの土器がまとまっていました（7頁右下写真）。

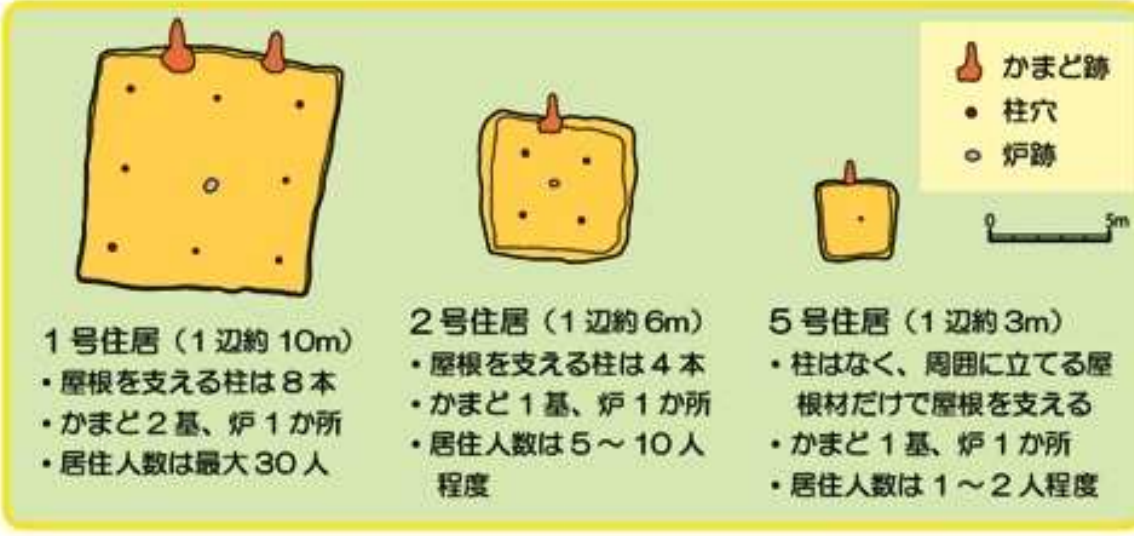
## 擦文時代の竪穴住居の復元

「擦文の村」では、実際に竪穴住居があった位置に実物大で復元した建物を展示しています。建物の復元は、基本的には発掘調査で分かった壁の形や柱の位置をもとにしています。発掘調査だけでは分からない屋根の構造などは、アイヌの人々の伝統的な建築法などを参考にしながら推定復元しています。

◀竪穴住居の骨組みの復元模型

擦文時代には釘は使われていなかったので、釘を使わずに柱材を組み立てる設計で復元してあります。

こうした骨組みの上に葦などの束を並べて固定し、屋根を造っていました。また、擦文時代の竪穴住居には屋根を土で覆って断熱性を高めたものもあったようです。




▲「擦文の村」で発掘された竪穴住居とその大きさ

擦文時代の竪穴住居には様々な大きさのものがあり、それに応じてかまどや柱の数など造りが違っていました。はっきり分かっているわけではありませんが、住居の大きさは住んでいた人数と対応していると考えられます。平均的な大きさである1辺約6mの2号住居が子供を含めて5～10人程度の1家族で住んだと推定して、これを基準に炉やかまどの周りを除いた面積で比較すると、1号住居の居住人数は2号住居の3倍程度、5号住居では5分の1程度だったのではないかと思われます。

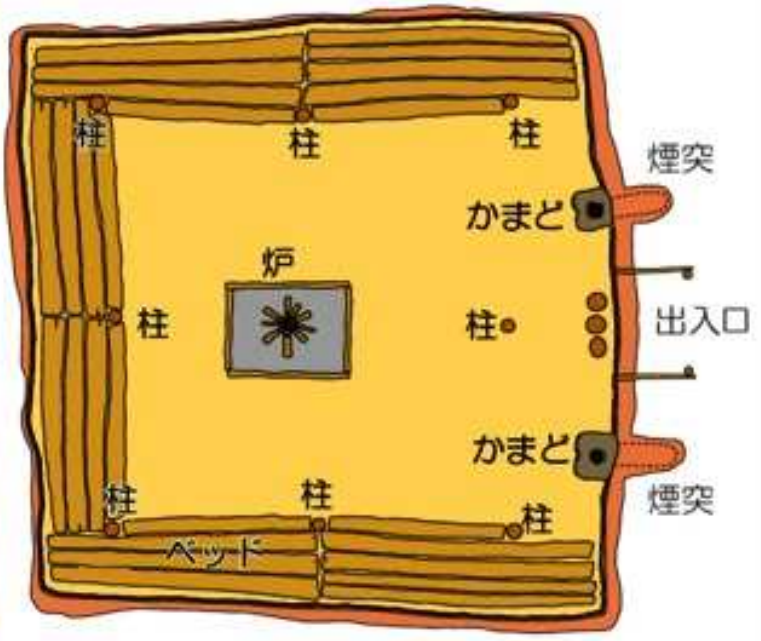
# １号住居の復元建物設計図

※復元建物は当時の姿を推定して造られていますが、建物の耐久性を高め、長持ちするように工夫を加えた部分もあります。

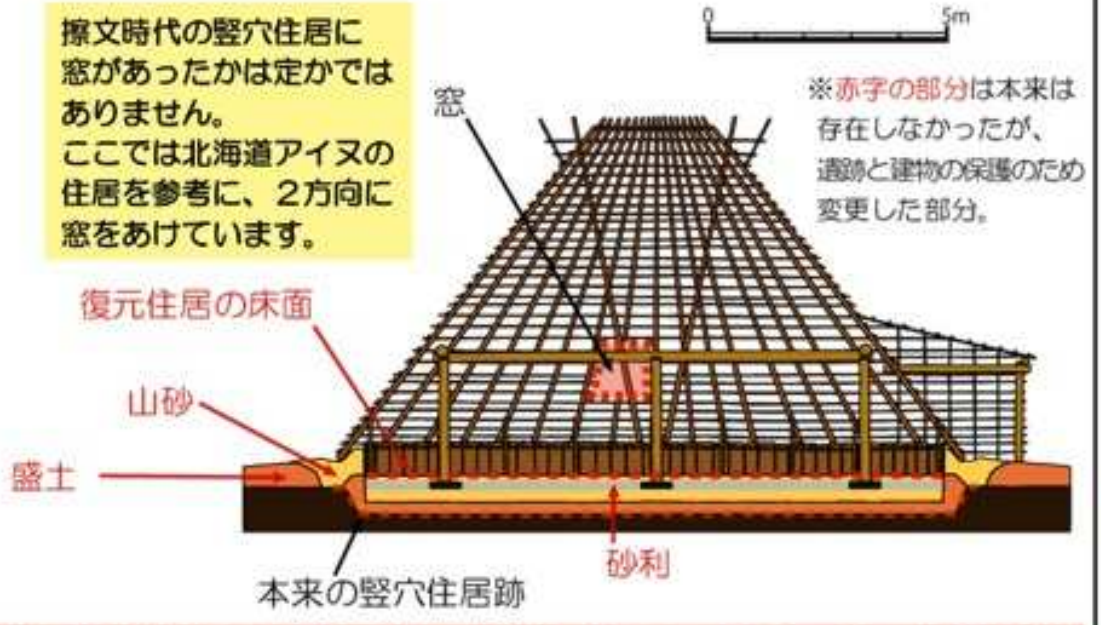
柱や炉、かまどの配置は発掘調査で分かったものを再現しています。

竪穴は深さ約60cmで、さらに、竪穴の周りには掘った土を盛り上げた高さ10cm程度の土手があったと推定されます。

出入口の場所は発掘では分かりませんでした。他の遺跡の発見例を参考に、かまどの横で、外に張り出す形にしています。




擦文時代の竪穴住居に窓があったかは定かではありません。ここでは北海道アイヌの住居を参考に、２方向に窓をあけています。




復元住居は実際に竪穴住居があった位置に建てていますが、本来の竪穴住居跡を壊さないよう、上に土を盛り、一段高い位置に床面を作って建てています。

また、実際の竪穴住居では柱や屋根材が直接地面に立てられることから、短期間で腐り、傷んでしまう場合もあったと思われます。復元では建物ができるだけ長持ちするように山砂や砂利を入れて水分を逃がしやすくしています。

# 続縄文の村

「擦文の村」の北東側にはそれより古い、続縄文～縄文時代の竪穴住居跡が残る遺跡が広がっています（遺跡としての正式な登録名称はST-08遺跡）。この区域の発掘調査では特に縄文時代中期の遺物が多く発見されましたが、台地の北側の角の部分では続縄文時代の遺物や住居跡も見つかっており、続縄文時代の集落もあったことが分かりました。そこでこの一角を「続縄文の村」と呼んでいます。

◀「続縄文の村」に残る竪穴住居跡（白い点線で囲んだ部分）

住居跡は円形や楕円形の窪みとなって残っています。擦文時代の住居跡より埋没が進んで浅くなっています。

一部は発掘調査で一度掘り返されたものですが、ほとんどは手つかずのまま窪みで残っています。

続縄文時代は約2400年前から約1400年前まで、およそ1000年間続いた時代です。本州では弥生時代から古墳時代の頃にあたります。弥生時代に、水田で米作りを行う文化が東北地方まで広まりましたが、気候が寒冷な北海道ではこの時代に米作りが行われることはありませんでした。その代わり、縄文時代と同様の狩猟・採集によって生活する文化が続いたことから「続縄文時代」と呼ばれています。

「続縄文の村」に復元された竪穴住居 ▶

発掘された続縄文時代の竪穴住居跡の位置に、6号住居（写真奥）は建物を復元、7号住居（手前）は床と壁の位置を示す形で再現してあります。

## 続縄文の村の発掘調査

続縄文の村では６号～８号住居の３つの竪穴住居跡が発掘され、このうち６号・７号住居が続縄文時代に造られたものだったことが分かりました。８号住居はこれより古い縄文時代中期のものでしたが、使われなくなった住居の跡に捨てられた続縄文時代の土器などが見つかっています。縄文時代の遺跡の上に続縄文時代の遺跡が重なって残された場所だったということになります。

◀ ６号住居跡

長軸 7.7 m、短軸 6.2m の楕円形に、長さ 1.5m の出っ張り（写真上部）が付いた形です。この出っ張りの部分は出入口だったと考えられています。中央より右寄りの赤茶色の部分が炉跡です。

７号住居跡 ▶

長軸 7.7m、短軸 7.3 mの少しいびつな楕円形の床面をもつ竪穴住居跡です。出っ張りがない以外は６号住居とほぼ同じ大きさで、炉跡はほぼ中央にありました。

## 続縄文の村の出土品

宇津内IIb式と呼ばれる1～2世紀頃の土器と、後北C2・D式と呼ばれる3～4世紀頃の土器が見つかっており、このことから続縄文の村で人が活動した時期が分かります。

また、黒曜石製の石鏃（矢じり）やナイフ、緑色片岩製の石斧など各種の石器も見つかりました。続縄文時代には鉄器も使われましたが数は少なく、まだ石器が主役の時代でした。

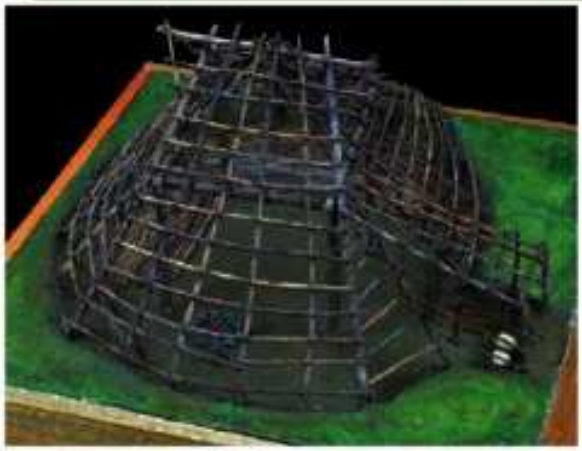
▲宇津内IIb式土器（6号住居出土・右：高さ21cm）

▲石器（6号住居出土）

上段：石鏃4点、下段：左から石斧とナイフ2点（石斧の長さ5.5cm）。

▲後北C2・D式土器（7号住居出土・左：高さ13cm）

## 続縄文時代の竪穴住居の復元



続縄文時代の竪穴住居は基本的に竪穴部分が円形か楕円形で、出入口部分に出っ張りを造る場合もありました。竪穴の内部には4本、またはそれ以上の柱の跡が見つかります。こうしたことから、外側の屋根材を円錐状に組み立て、これを内部の柱と梁で支える構造が想定されます。

◀竪穴住居の骨組みの復元模型

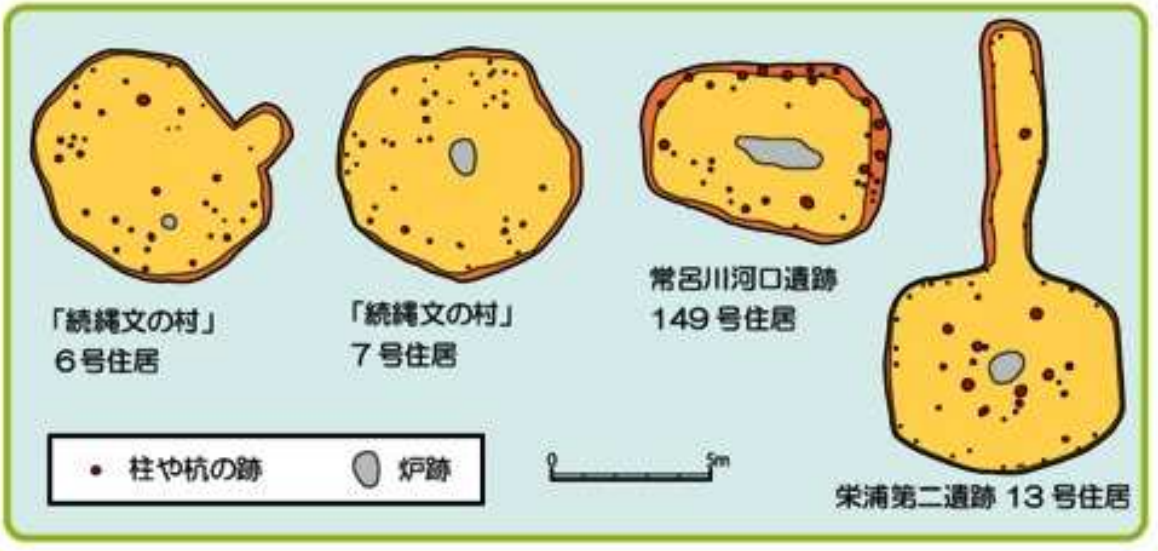
## ６号住居の復元建物設計図

出入口は外側に張り出す形で作られていました。外気を入りにくくして寒さを防ぐための工夫と考えられています。

周りが斜面のため、竪穴の壁は20～50cmの深さになっていました。
本来は掘った土が周りに盛られていたので、復元では壁の深さがほぼ均等になるように整えています。

この住居では炉がかなり片寄った位置にありました。場所を示すため石囲い付きで復元してありますが、本来は石囲いのない炉でした。

本来の竪穴住居跡を保護するため、盛土で覆った上に同じ大きさの竪穴を再現しています。今後、擦文の村１号住居と同じように、柱や屋根材を長持ちさせるため、山砂や砂利を入れた盛土を行って建て替えを行う予定です。




▲ 様々な形の続縄文時代の竪穴住居

続縄文の村６号住居や栄浦第二遺跡13号住居のような出入口が張り出すタイプは続縄文時代に特徴的なものです。広さは30～40㎡程度が平均的でした。柱穴以外に、壁際から細い杭の跡が見つかる場合があります。これは、竪穴の壁を木や草などで覆い、杭で押さえた跡ではないかと推定されます。

## 縄文の村

「続縄文の村」から遊歩道に沿って東に進むと「縄文の村」と呼んでいる場所になります。この区域の発掘調査では縄文時代中期の竪穴住居跡や遺物が発見されました。「遺跡の森」で見つかっている中では最も古い時期の住居跡がまとまっている場所です。

▲「縄文の村」に残る竪穴住居跡（白い点線で囲んだ部分）

住居跡は円形や楕円形の窪みとなって残っています。大きさ 3m 前後の小さなものが多くなっています。

## 縄文の村の出土品

発掘調査では土器や石器が多数出土しました。土器は約 4500 年前、縄文時代中期の終わり頃に作られた北筒式と呼ばれる土器が多く見つかっています。石器は黒曜石の石槍やナイフなどが見つかっており、同じく縄文時代中期のものと考えられます。

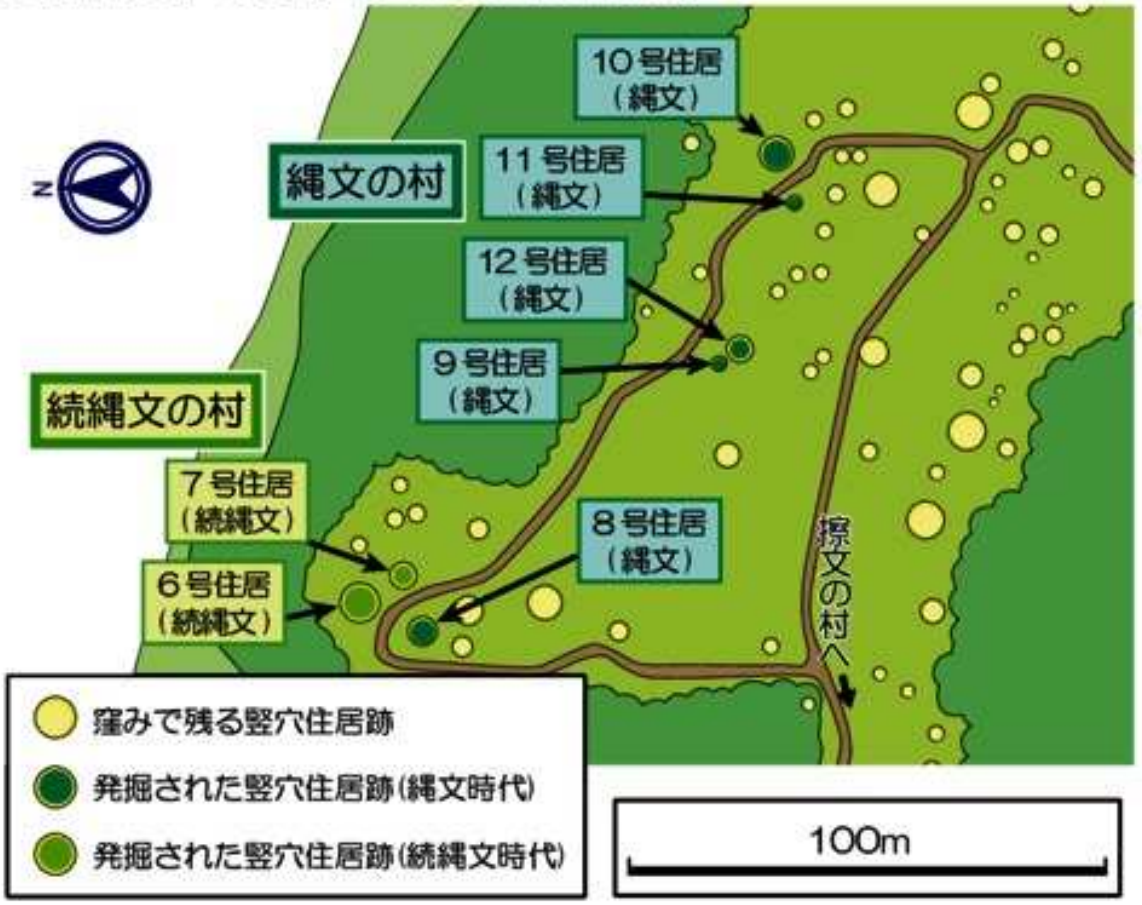
▲ 縄文の村出土の石器と北筒式土器破片

石器は石槍 ( 左端、長さ 19cm) とナイフ類。

北筒式土器▶
(7 号住居跡
付近出土 )
細長い筒形の
形状が特徴。
(復元の高さ
約 50cm)

## 縄文の村の発掘調査

縄文の村では９～12号住居跡の４基の発掘調査が行われました。住居跡内から出土した遺物から、いずれも縄文時代中期のものと判断されています。続縄文の村で発掘された住居跡と比べると小形のものが多くなっています。



▲10号住居跡

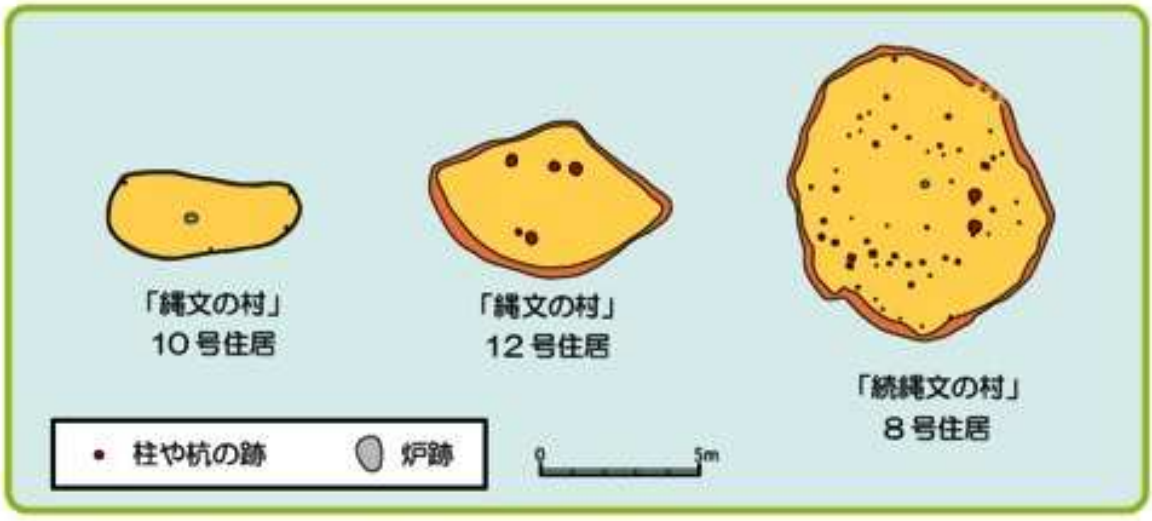
6.6m × 3.1mの細長い楕円形をした竪穴住居跡。中心付近に炉跡があるものの、柱穴の跡は見つかっていません。

▲12号住居跡

7.6m × 4.8mの菱形に近い形をした竪穴住居跡。はっきりした炉跡は見つかりませんでした。

## 縄文時代の竪穴住居の復元

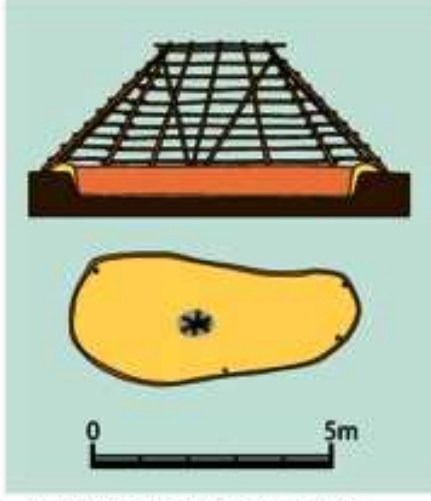
縄文の村には復元建物の展示はありませんが、発掘調査の結果に基づいて縄文時代の竪穴住居がどのようなものだったか考えてみたいと思います。




▲ 遺跡の森で見つかった縄文時代の竪穴住居跡

縄文の村で発掘された竪穴住居跡は比較的小さなものとなっています。10号住居では、竪穴の内側に十分な太さの柱穴が見つからなかったことから、竪穴の周囲に立てた屋根材だけで屋根を支える、テントのような形の建物だったのではないかと推定されます。また、12号住居ではほぼ正三角形に並ぶ柱穴の跡があり、テント状の屋根を内側から支える形になっていたと推定されます。

一方、続縄文の村で見つかった縄文時代中期の竪穴住居である8号住居は縄文の村で見つかったものより大形です。この住居は出っ張った出入口がないのを除けば続縄文時代の6号住居に近い規模・構造のものだったようです。




◀ ▲ 竪穴住居（10号住居）の骨組みの復元模型と復元図

竪穴の内側に支柱のないテント状の構造で復元したもの。

## 付録① オホーツク文化 ～ もう１つの竪穴住居文化

遺跡の森では縄文・続縄文・擦文の各時代の竪穴住居跡を見ることができますが、常呂遺跡の別の地区ではもう１種類、「オホーツク文化」の竪穴住居が見つかっています。

５～９世紀頃、北海道のオホーツク海沿岸には北のサハリンから異民族が移り住んできていました。「オホーツク文化」とはこの異民族が残した文化のことです。オホーツ文化では海での狩や漁が生活の中心となっており、遺跡も海沿いの場所に分布しています。

北見市の海岸部では７～９世紀頃にオホーツク文化の遺跡が残されました。国指定史跡「常呂遺跡」内の栄浦第二遺跡やトコロチャシ跡遺跡ではオホーツク文化の竪穴住居跡が保存されています。

**▼ 発掘されたオホーツク文化の竪穴住居跡（トコロチャシ跡遺跡［常呂遺跡の一部］）**

オホーツク文化の竪穴住居は形と大きさが特徴的です。床面の形は五角形または六角形で、大きさは写真のもので長さ12m、幅9m、大きなものでは長さ15mに及ぶものも発見されています。このように他の時代・文化に比べて大きな住居が普通でした。複数の家族、20～30人が共同で住んだものと考えられています。

**オホーツク文化竪穴住居の復元模型 ▶**

六角形の竪穴にどのような形の屋根が造られていたのか、確かなことは分かっていません。発掘調査では木組みの上をシラカバの樹皮で覆ったことが分かっています。さらにその上に土をかぶせて断熱性を高めていたと推定されています。

**◀ オホーツク文化の彫刻品（栄浦第二遺跡［常呂遺跡の一部］出土）**

オホーツク文化はクマを中心とした動物に対する特別な信仰でも知られています。例えば、住居内には狩で獲った動物の骨を集めてまつる「骨塚」という場所が設けられていました。特にクマの頭骨が多く集められたことが知られています。

これとともに、動物を表現した彫刻品が多く見つかるのも特徴です。左の写真は鹿角の加工品で、先端にクマの頭が彫られています。

## 付録② アイヌ文化期 ～ 竪穴住居から平地住居へ

北海道では擦文時代が終わる13世紀頃を最後に竪穴住居が使われなくなっていきました。地方によっては竪穴住居を使う場合もあったようですが、一般にはアイヌ文化期になると平らな地面に柱と壁を立てる「平地住居」に住む生活へと変化しました。擦文時代の竪穴住居のような「かまど」はなくなり、炉（いろり）が調理の場所になりました。

こうした平地住居は竪穴住居のように地面に目立つ形で跡が残ることがないため、北見市内の遺跡の発掘調査でアイヌ文化の住居跡が確認された事例は今のところありません。アイヌ文化の遺跡としてはチャシや儀礼の場所の跡などが見つかっています。

**◀アイヌの平地住居模型**

写真はサハリンのアイヌの住居の復元模型で、左半分は内部構造、右半分は外壁まで再現しています。北海道東部のアイヌも模型のようにシラカバ樹皮を使った平地住居を建てたようです。なお、サハリンでは平地住居は夏用で、冬用の竪穴住居（2頁写真）が20世紀初めまで使われました。

**トコロチャシ跡（「常呂遺跡」の一部）▶**

「チャシ」とはアイヌ語で砦のことで、戦いに使われたり、神々への祭りや村の集会に使われたりした場所です。

「トコロチャシ」は18世紀初めに築かれたもので、崖に面した場所を空堀で四角く区切っています。発掘調査では空堀に沿って柵の跡も見つかっています。

**◀ 遺跡の森のチャシ跡**

遺跡の森にもチャシ跡の可能性のある場所があります。擦文の村の4号住居の後ろで、崖の先端が溝で区切られている場所がそうです。但し、一般的なチャシと比べて小さすぎること、部分的な発掘調査ではアイヌ文化の遺物が見つかっていないことから、チャシとして使われた場所か確実には分かっていません。

## 遺跡の森の草花

遺跡の森では春から夏にかけて、かわるがわる様々な植物が花を咲かせます。下の写真はその中のほんの一部です。遺跡を歩くときには足下の草花にも注目してみてください。

キタミフクジュソウ（4月頃）

アズマイチゲ（5月頃）

アイヌタチツボスミレ（5月頃）

オオバナノエンレイソウ（5月頃）

エゾネコノメソウ（5月頃）

フデリンドウ（5月頃）

クリンソウ（6月頃）

ヤマブキショウマ（6月頃）

オオウバユリ（7月頃）

クルマユリ（7月頃）

ネジバナ（8月頃）

ツリガネニンジン（8月頃）

史跡常呂遺跡整備ブックレット

# ところ遺跡の森ガイドブック

平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行
北見市教育委員会常呂教育事務所
ところ遺跡の森
〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦 371
印刷
株式会社小林印刷
〒090-0818 北海道北見市本町 5 丁目 9 番 25 号